
ポケットモンスター Dream story

アストン・ヴォルテクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター Dream story

【Nコード】

N2632Y

【作者名】

アストン・ヴォルテクス

【あらすじ】

ポケモンを捕まえに行こうとしていた、アストン・ヴォルテクス。そんな彼は、前日夢を見ていた。それは、ポケモンになり、綺麗なお姉さんのポケモンになるという夢だった。そして、その夢と似たような出来事が起こったのだった！なんと、自分がポケモンになり、綺麗なお姉さんではなく、かわいい女の子のポケモンになったのだった。これは、ポケモンになってしまったアストンとこの物語のヒロインのアストンの主人とその仲間達がポケモンリーグに挑戦するまでの物語である。

作者の方は、必ず評価を

してくださいね！ 正直にやってください！ これで、どこを直せばいいのか、多分少しは分かりますし。そして、出来れば作者の方も読者の方も感想でも指摘とかしてください！ どこを直せばいいか詳しく分かりますから。ご協力お願いします！ では、コミカルでシリアスな「ポケットモンスター Dream story」へ、Let's GO!!!!!!

主人との出会い（前書き）

相談に乗ってくれた方々、本当にありがとうございました！！！！！！！！

では、お待たせしました。

—！！！！—

主人との出会い

「ポケットモンスター」、縮めて「ポケモン」。これは、この世界にすむ、不思議な生き物である。そして、ここ、「オリジン地方」にある小さな町、「ムセシタウン」に一人の少年がいた。この少年の名は・・・

—— アストン・ヴォルテクス。

身長151センチでゼピア色の髪の毛（レブリアのほうは黄色）が特徴で、やけに長く、（一番長いので85センチ）前髪が少々はねている。そして、赤をベースとした、帽子をかぶり、黄緑をベースとしたパーカー、そして、黒をベースとしたポケットがたくさんついているズボンをはいていた。このズボンは半ズボンにすることも可能で、パーカーにはお腹の辺りに大きなポケットが着いている。そして帽子は、この世界でポケモンを捕まえるのに必要な「モンスターボール」の絵が描いてある。

そして、彼は、家を出てポケモンを取りに行こうとした。したのだが。なんと、不思議な不思議な出来事が起こってしまった。それは・・・

—— 自分自身がポケモンになってしまったのだった！！！！
何故そうなったか。それには、ある原因があった。いやないと困る。マジで。理由は、1億2000年前にさかのぼる。

??「生まれてねえよ！！！！」

失礼しました。 1時間20分前にさかのぼる。

??「どれだけ間違えてたんだよ!!!」

アストンは、それまで、夢を見ていました。とてもとても不思議な出来事です。それは、自分がポケモンになって、それはそれはとても美しく、輝いていて優しくて、面倒見がよくてポケモンがとっても大好きな綺麗な綺麗なお姉さんトレーナーにつかまるという夢でした。一方、そのころ、アストンが寝ていると、アストンの周りを包むかのように、光が現れ、アストンの右手に変な紋章がつけました。この紋章こそがこうなってしまった原因です。

ちなみに、この紋章の効果は、この紋章を宿したものを、外に出た瞬間にポケモンにしまい、トレーナーに捕まえられ、トレーナーと一緒にポケモンリーグに挑戦し、見事全勝するまでは、絶対に元に戻らないという効果です。さあ大変！アストンはどんなトレーナーに捕まり、どんな出会いがあり、どんな冒険になるのか、ドキドキワクワクなスーパーウルトラチョロチョロホイホイミラクルハイパー面白い冒険物語の始まりです!!!

あ、そうだ、サービスとして、ちょっとだけ話を進めてあげよう！

??「何がサービスだよ！」

お？ちょうどいいところに。皆様、この??こそが、この物語の主人公、アストン・ヴォルテクス君です！ささ、自己紹介自己紹介！！

アストン「お、おう。やあ、俺はアストン・ヴォルテクスだ。綺麗なお姉さんが大・・・」

はい、ありがとうございます。では今から物語スタート！

アストン「ってちょっと待て！！？俺の自己紹介はまだおわって・
って今から物語かよ！！もう始まってたんじゃないの！？さっきま
でのは何だったの！！！！？」

・
・
・
・
・

アストン「あれ？おつかしいな。なんか人とか家とか、いつもよ
りでかく感じるぞ？それに・・なんだこの状況・・大勢の人が
俺を囲んでるーっ！！！！？」

アストン・ヴォルテクスは急展開にとっても驚いていた。

アストン「いや、フルネームじゃなくていいから（汗）それにし
ても、どうして？何で？綺麗なお姉さん達は？」

アストンはそういいながら（周りにいる人たちには鳴き声にしか
聞こえない）指を口にくわえていた。すると、なんといきなり大勢
のかわいい子＆綺麗なお姉さん達だけの女性陣が集まってきて、目
をハートにしていた。

アストン「お？お？なんか結構いい感じ・・・でへへ（笑）」

アストンはそういいながら（周りにいる人たちには鳴き声にしか
聞こえない）少々だれをたらししてしまった。だが、しばらくする
と、さっきまでいた大勢の人たちは全く別の方角へいつてしまった。
アストンはあれ？という気持ちと、悲しい気持ちの両方の気持ち
を持ちながら人盛りの多いところへ足を運んだ。運んだのだが。途
中にあった水溜り（前日は大雨だった）が目に入ると、今まで以上

に驚いていた。

アストン「俺が・・・俺が・・・ヨーギラスになっちよるーっ
!!!!!!」

アストンはそういいながら（周りにいる人たちには鳴き声にしかな聞こえない）体を後ろに引き（両手を後ろにやり、いかにも驚いているようなポーズ）驚いていた。

ちなみに、ヨーギラスとは、最初に言ったポケモンのことで、全身がほぼ黄緑色で出来ていて、お腹の辺りが赤、その周りにマークが2つあり、頭にあるちょんまげ（とさか）がチャームポイント（多分）のポケモンだ。ちなみに、このポケモンの種類はいわはだポケモンで、タイプ（ポケモン全匹が持っているもの）はいわとじめんだ。

アストンは何がなんだか分からなくて、パニックになっていた。すると、いきなり右手が痛くなった。激痛だ。すると、後ろから女性性の声が聞こえた。

??「チコ、つるのムチ！」

チコ（？）「チコ！」

アストン「なに！？うわーっ!？」

??「そのまま地面に叩きつけて！」

チコ（？）「チッコオ！」

アストン「ひでぶっ！」

??「よし！いっけー！！モンスターボール！！」

女性の声が、そういうとモンスターボールをアストンに投げつけた。アストンの頭にそれが当たると、アストンはその中に入った。

「モンスターボールの中」

アストン「何だろう・・・ここ・・・光が温かくて・・・いい気分になる・・・。ポケモンたちは皆、こんないいところに入れるんだな」

アストンはそういいながら自分のことを考えた。

アストン「どうしてヨーギラスになっているんだろう？」

アストンがそんなことを考えていると、いきなり体が激しく動き、温かい光の中をあっちにいたりこっちにいたり、ウロウロしていた。すると、いきなり光の中に何かの空間が現れ、アストンを吸い込み、そしてアストンがその中に入ると同時に空間も消えてしまった。

「ムセシタウン」

??「ヨーギラス！出ておいで！」

女性の声がそういうと、アストンはいつの間にかムセシタウンにいた。

アストン「あれ？どこどこ？」

??「あ・・・あ・・・しゃ・・・しゃべった!!? 君、人間の言葉がしゃべれるの!!!?」

アストン「え!? え、なにこの展開! RPGでいうまさかの運命の出会い!!!? っていうやつ!!」

??「ふふ、君って面白いね! ヨーギラスなのに。私はナツカっていうんだ。こっちは私のパートナーのチコリータでチコっていうの!」

チコ「チコ!」

チコリータというのもポケモンで、はっぱポケモン、タイプはくさだ。ちなみに、自分はポケモンの鳴き声はあまり分らないので、俺のイメージでやっています。ちがっていても、文句は受け付けません!

アストン「お、おう! お、おれは・・・ア、アストン・・・ヴォ・・・ヴォルテクスだ!!」

アストンは照れながら、何とか自己紹介が出来た。

ナツカ「へえ、名前があるんだね、ストーン・ボルテクスか」

アストン「それだと石になっちまうじゃねえか! そんな名前じゃない! アストン・ヴォルテクス!!」

ナツカ「いい名前だね。よし! 決めた! あなたのニックネームはボウちゃんね!」

アストン「俺はアストンだーーーーっ！！！！！！それに”ボ”じゃなくて”ヴォ”だし！！間違えるなし！！！」

ナツカ「私はあなたの主人だから、言うことは聞きなさい！！って、ちゃんと目を見て！？どこ向いてるの！」

アストン「よそ見してねえし！！」

いや、アストンは余所見をしていた。そして、ナツカは余所見をしているアストンに注意をした。でもアストンはちゃんと前を向いていた。だが、それは悪魔で人から見れば。そう、アストンはヨーギラスでちっちゃくなつたため、上を見ろという習慣がなかったのだ。

もともと、アストンは二トだったため、自分より背の高い人を見るのは初めてだった。ちなみに、最初に家に出たときも実はいうと、足の数で大勢といったのだ。実はいうと、その周りにいたのは5人で、アストンは足を見て、一本の足＝一人の人間、と認識してしまつたのだつた。

アストンはナツカにいわれると、ゆっくりと上を向いた。すると、だんだんと顔が赤くなり、ついには上を向いたまま鼻血が出てしまった。なぜなら・・・

——か、かわいい・・・／／／

アストンは彼女の顔を見た瞬間にそう思った。そう、ナツカはめっちゃかわいい女の子だったのだ。きつと、この顔だったら、もうセクハラもされているだろうというほど可愛かった。

ちなみに、容姿は青い髪が肩辺りまであり、目は少々大きく胸も

結構大きくお腹はスツとなっていて、足が細くとても美しい足だった。そして、髪の毛には髪留めもつけている。

アストンは思った。

——こんなかわいい子が俺の主人だなんて・・・なんて俺は幸せなんだ・・・！！、と。

ナツカ「ふふ！かわいい！ボウちゃん。よしよし。ほら見てチコ、新しい仲間よ」

チコ「チッコ！」

ナツカはそういいながらアス・・・ボウを抱っこし・・・

ボウ「いやアストンでいいんだぞ！？っ！か変えるの遅いぞ！！？ってかいつの間にかボウになってるし！！！」

全身が緑色で頭に大きな葉っぱをつけているポケモン、チコリータのチコにボウを近づけた。チコもとても喜んでいるらしく、その場でピヨンピヨン飛び跳ねていた。

ボウ（な、なんだこいつ（チコ）・・・かわいいじゃねえかコノヤロー・・・／＼／＼）

ボウはチコにも一目ぼれした。ちなみに、チコは♀（メス）である。

ナツカ「ボウちゃんはこれから私とこのチコと、これから仲間になるポケモンたちと一緒に、ポケモンリーグに行くんだよ？いい？」

ナツカは、抱っこしているボウにそう言い聞かせた。だが、ボウ

はナツカに抱っこされて変態モードを発動しているため、全然聞こえていなかった。

ナツカもそれに気づかず、ルンルン気分のままモンスターボールに入れた。入れたのだが。突然モンスターボールからアス・・・ボウが出てきた。

ボウ「だからアストンでいいんだって！いちいち言い換えるな！つていうか早く名前をアストンに・・・」

はいはい、今は小説ないだからちゃんと言うこと聞いて。じゃないと目玉をほじくるぞ？」

ボウ「モンスターボールの中、なんか変な感じがするんだよね。だから、モンスターボールに入れないで？（冷汗）」

（キラリッ）ボウはそういいながらナツカに抱きついた（足に）

ナツカ「えっ？でも、チコもモンスターボールいやだっけ言うんだよね・・・どうしよう・・・」

ボウ「そこを何とか!!」

ナツカ「・・・分かった。じゃあ、二人とも外に出ていいよ！でも、ボウちゃんは自力で歩いてね。チコはいつでも私に乗っていいよ」

ボウ「え？なんで俺はダメなの？」

ナツカ「だっけ・・・重いもん。72kgを抱っこできた私ってすごいと思わない？」

うん、すごいよ。とっても。もうまさにかい・・・なんでもないです。

こうして、この物語のヒロイン、ナツカと主人公ボウとその仲間達の冒険は始まったのであった。

主人との出会い（後書き）

あと、更新はカメレオンです。（＝超遅い）

ですが、どうかお読みいただければと思います！

よろしくお願いします！！！！

評価を必ず作者の人はやってね！！！！！！

ポケモンバトル！（前書き）

はい。ポケモンバトルです。

???「ようーギラス」

お前はまだ出るなぐ！！！！ドアホが！！

ポケモンバトル！

ボウ「そういえばさ。ナツカって何歳なの？」

ナツカ「8歳」

ボウ「へえ……ってうそおおおおお！……！！！！！！」

ボウは旅に出てすぐから驚きの声を上げた。

ボウ「は……は……8!!!!?嘘つくなよ!!!!」

ナツカ「本当よー！！本当に8歳よ！じゃあ聞くけど、ボウちゃんは何歳なの！？」

ボウ「お、俺！？俺は・・・その・・・えつと・・・あ、あれだ・・・
・（やべえ・・・歳忘れた・・・）」

ボウは、とんでもないことになってしまっていた。なんと、自分の歳を忘れてしまったのだった。これはとんでもない大失態！ボウはどうするのか！！？とそのときだった。

ナツカの頭に何かが当たった。音はというと……

ヒューン・ドカ
ン！！！！！！！！

という音だった。これにあたったナツキはなぜか小さいたんこぶだけですんでいた。今のは絶対にB○○が爆弾を落としたような音

だ。なのになんこぶだけって・・・どゆこと!!? あ、失礼失礼。ついつい突っ込んでしもうた。

ナツカが、あたったところをなでながら後ろを向くと、そこには一匹のポケモンと見える物体と一人の少年が立っていた。

「やーいやーい！！バカツバカツ！それにそんなバカツの相棒のチカンも一緒か！！あはははは！！！！おや？もう一匹増えていくようだね。まあ、どちらにせよ、弱いポケモンだろ！」

「ダン！ダーン！！！」

「??? おお！そうかそうか！！」 ダンバル 「もそう思うか。あはははははは！！！！！！」

その少年は漆黒の黒髪に黒い帽子をかぶり、黒と黄緑をベースとしたジャケット、黒と水色をベースとしたポケットがたくさんついているズボン、そして、黒い革で出来た手袋をしていた。その隣には、青くて、鉄のようなもので出来ているポケモンてつきゅうポケモンのダンバルがいた。

ナツカ「あなたは……レツハ！」

レッツハ「よっ！バカツ。それと、チカンちゃん？」

レツハという少年はからかいながらナツカとチコの名前をわざと間違えて呼んでいた。

ナツカ「私はナツカ！！こっちはチコよ！もう間違えないでよ！！」

レッツハ「はん！ テメエなんか、一生バカツでいいんだよ！ バカツ！

！」

ナツカ「何ですって？もういつか・・・」

ナツカが言葉を言おうとすると、いきなりチコがレッツハに向かつてつるのムチを仕掛けた。だが、それをダンバルが「とっしん」という技で跳ね返した。

チコは思い切りつるのムチを放ったのか、つるのムチはそう簡単にはとまらなかった。そして、あと少しチコにあたり、チコにダメージが来るといふときだった。なんと、ボウがそのムチを喰らって、チコを守ったのだった。

ボウ「ステキなレディをいじめるなど・・・男として恥ずかしくないのか！！！」

ボウはレッツハにそういった。そういったのだが。レッツハには泣き声にしか聞こえない。だが、それをダンバルが勘違いし、自分に言っているのかというかのように、いきなりボウに突進を仕掛けた。すると、ボウの後ろからまたもやチコがつるのムチを放ち、今度はつるのムチをはじき、ダンバルをかく乱させた。

ボウが後ろを見ると、チコが笑顔を見せながらボウを見ていた。

ボウ（か、かわいいなコノヤロー！！！！）

ボウはまたもやそう思っていた。そして、また前を向き始めると、前を向いたまま、ナツカにいった。

ボウ「ナツカ！あのレッツハっていう人にポケモンバトルを申し込め！なんかちよつと頭にきたからさ！あいつ！」

ナツカ「で、でも・・・」

ナツカは戸惑っていた。何故だか知らないが。

ナツカ「どうせ、私なんか負けちゃうよ。だって、昔からレッツハに
いじめられていて、いつも負けちゃうもん。3歳の時からチコと
一緒だけど、チコもまだ幼いし・・・と言っても、このチコは3代
目のチコなんだけど・・・」

ボウ「え？」

ナツカ「実は、このチコは3匹目のチコリータなの。一匹目は、レ
ツハとレッツハのダンバルにいじめられて死んじゃって、二匹目も、
一匹目と同じでいじめられてこの子を産んだら死んじゃって・・・
もし、また負けちゃったら今度はこの子が・・・!」

ナツカはそういいながらだんだんと涙があふれ出してきた。する
と、ボウがまだ前を見ながらナツカに言った。

ボウ「大丈夫さ」

ナツカ「え？」

ボウ「大丈夫だっていつてるの!チコは俺が守る!俺がいるさ!ど
うせあいつはあのダンバル一体だろ?今度は今日は俺をバトルに出
してくれ!絶対にチコを傷つけさせないし、死なせたりもしない。
俺があいつらをぶった切って、チコを守って、無事にナツカたちと
一緒にポケモンリーグに行く!俺は、ボケでザコで泣き虫で弱虫だ
けど、男だ!男は、大事な人を守んなきゃいけないんだ!約束も守
らなきゃ。俺は死んでもいい。でも、死ぬ前にお前達を守る。」

ボウはここまで言うと、ゆっくりとナツカの顔を見ながら、こう言った。

ボウ「約束だ！そして、俺は宣言する！絶対に、仲間を・・・大切なものを守ってみせる！！！」

ボウがそういうと、ナツカは涙を拭きながらうなずいた。そして、レツハを見るとこう言った。

ナツカ「レツハ！私はあなたに、ポケモンバトルを申し込む！！！受けてたちなさい！！！」

レツハ「はん！テメエなんか、また泣かしてやるよ！今日は、そのチカンちゃんと、ザコポケモンもぶつ殺してやる！！！行くぞダンバル！！！！今日は特別に1対2で勝負してやる。お前はそのチカンちゃんとザコポケモンを出していいぞ？あはははははは！！！」

ナツカ「いいわ。ただし、もし私が勝ったら・・・私の言うことを聞いてね！！！」

レツハ「寝言はおねんねしてる時に言ってるや！！！ダンバル、とっしん！！！」

ダンバル「ダーン！」

ナツカ「ボウちゃん！もうここはあなたの自由よ！！！」

ナツカは、そう指示すると、チコを抱き上げた。そして、それと同時に、待ってました！！！！といいながらボウがフィールドへ出た。

ボウ「へん！そんなとっしんしか能のないポケモンなど、ひねり潰してやるわ！！喰らえ！」かみつく”！！”

ダンバル「ダン！？」

ボウはとっしんしてくるダンバルを口を大きくして待っていた。すると、それに勢いよく突っ込んできたダンバル。それをタイミングよく牙でかみついた。ダンバルはとっても硬かったが、負けず嫌いのボウ。全パワーを使って何とかダンバルにダメージを与えることは出来た。だが、ダンバルのとっしんの勢いが大きかったせいか、吹っ飛びながらでの攻撃だった。

ボウ「よつと！。りゅうのまい！！」

ボウはダンバルから距離を離すと、そこでりゅうのまいを踊った。それを計3回繰り返すと、ダンバルが要約とっしんしてきた。なぜか、もうダンバルは息が切れていた。多分、今までダメージを受けたことがなく、防ぎ方がよく分からずに大ダメージを負ってしまったのだろう。

ボウ「来たな！いわなだれ！そしてかみつく！！」

ボウはダンバルがとっしんしてくるのを待っていたかのように飛び上がり、いわなだれをおこして、ダンバルの道をふさぎ更にかみつくを行った。このいわなだれの効果は、ダメージを与えるためではなく、相手の勢いを最小限まで抑え、更にその勢いで岩にぶつかって防御を壊し、無防備の状態のダンバルに攻撃を仕掛けるという作戦だ。

ボウの作戦は見事決まった。ダンバルはボウの思うように動いて

いたのだった。

まず、岩にぶつかり勢いを落とし次に防御を壊し、なおかつダメージも受けていた。このダメージは岩にぶつかった痛さと、突進の勢いが強くて反動を受けたダメージだ。そして、岩をつつきると待っていたボウの口に入ると同時に、ボウがかみつき、ダメージを与えた。

ボウ「これで最後だ！！いやなおと攻撃！」

ボウは止めとしていやなおとを行った。本来、この効果は相手の防御を下げる効果だが、今のダンバルからの状態からすると、もうダメージといってもいいだろう。ダンバルは、このいやなおとを聞いて戦闘不能となった。

そう。ボウは、見事ポケモンバトルに勝利したのだった！

ポケモンバトル！（後書き）

うーい！次回は、さあ、待ちに待ったレッツハとレッツハのダンバルを
ボコボコに・・・

「レツハ やめろおおおおおおお！！！！！！」

ダンバル「ダンバー……ル……! ! ! ! !」

フハハハハハハハ！無様な！！さて、次回はなんとあそこへ！！

ナツカの願いと・・・（前書き）

今回はナツカの願いと、あそこへ行きます！

ではどうぞ！

（レッハが嫌いなあなた！もしかしたら今回でナツカも嫌いになつてしまいかもしれないですよ。多分）

残酷な要素が前半にありますので注意を！

ナツカの願いと・・・

ナツカ「それじゃあ・・・私のお願い聞いてくれる？」

レツハ「な、なんだよ・・・」

ナツカ「あの・・・友達になって！」

レツハ「はあ！？」

ナツカのいきなりの言葉に、レツハは戸惑っていた。

ナツカ「チコを二匹も殺したのは許せない。多分、一生。でも、私に一番最初に話しかけてくれたのは、あなただった。そのとき、とっても嬉しかった。昔のあなたは、とっても優しく、いつも手伝ってくれたけど、なぜか急に意地悪をし始めて、どうしたのだろうと思っていた。まあ、私には友達がない、特に、多分女子からは全員から嫌われている、男子からも遠ざかれる、でも最初に話しかけてくれたのはあなただった。それで、どうして変わってしまったのかを知りたいの。でも、中々いうときがなくて、そうこうしているうちにこんなことになってしまった。でも、友達になったら、話してくれるかなと思って・・・。あの・・・友達になってくれる？」

レツハ「・・・っ・・・」

レツハはうつむいたまま何もいわなかった。そして、ボウに蹴られているダンバルをモンスターボールに戻すと、石を持ち、そしていきなりナツカに投げた。それを見事キャッチしたボウ。そして、レツハは、ボウを見るとこう言った。

レツハ「俺なんかが友達になっただって、多分いじめるとおもっ。きつと、いや絶対嫌な気持ちになる。だから・・・お前の願いは聞けない・・・」

ナツカ「でも約束したじゃん！」

レツハ「だからっ！」

ナツカ「だからじゃない！男でしょ！！？男なら・・・約束を守るって・・・守るってボウちゃんが言ってたもん！約束を守らない男なんて、男じゃない！」

レツハ「な・・・」

ナツカ「別に、なりたくなければそれでいいの。ただ・・・ちょっと知りたいの。何で人が変わっちゃったのか・・・」

レツハ「それは・・・その・・・えつと・・・」

レツハは指いじりを始めて顔を赤らめた。

レツハ「その・・・か・・・かわいいから・・・」

ナツカ「え？」

レツハ「だ、だから！かわいいからだよ！お前が！！」

ナツカ「あ・・・」

ナツカはその言葉を耳にすると、体が固まった。

レツハ「かわいいと・・・なんか・・・いじめたくなるんだよ・・・
。かわいいと・・・。お、お前はずるいんだ！まだ8歳なのにそんなスタイルで、性格も良くて！お前なんかまだいいほうさ・・・。
お前は知らないだろうけど、俺のほうがずっと辛いさ！これを見る
！！」

レツハはそういうと、上半身裸になり、背中を見せた。すると、
ナツカたちは言葉を失った。その背中には、タバコを押し付けられ
た後が約100以上あり、また刃物か何かで「レツハ死ね」や「レ
ツハ殺す」など、レツハに対して脅し言葉や、あるところには、銃
を撃たれたところもあった。そして、一番ひどかったのは、腰あた
りのところの肉が剥ぎ取られていたことだった。

ナツカたちは、レツハの背中を見るといろいろな事が頭に思い浮
かんだ。すると、レツハがなきながらいった。

レツハ「腰辺りにある傷は俺が2歳の時にやられたやつだ！俺は生
まれてすぐに親から虐待をされ、周りの人たちからも嫌われ、時に
は暴力を振られ、一番悪いときなんか、裸で気温が-30のここ
ろに半時間閉じ込められたこともあった！でも俺は、生きること
に誇りを持ち、ずっと耐えてきた！でも・・・でもお前は違った・・・
。いつも俺に笑顔を見せてくれた。そんな顔を見て嬉しかった。今
思うと、とっても悪いことだが、きっとお前にも同じ苦痛を味わっ
てもらいたかったんだと思う。それと、ずっとお前と二人きりでい
たかったんだと思う。多分、お前が女子とか男子からいじめられる
のは俺がいるせいだ。俺がお前のそばにいるから近寄らないんだ。
俺さえいなければ、お前は有名人さ。何せ、最初からお前は親に恵
まれ、お前は覚えてないかもしれないけど、たくさんの子供たちが
ら囲まれていた。そんなお前に俺は・・・ほれたんだ。これが・・・

真実さ。本当はお前をいじめるつもりなんてなかったんだ……。
本当は……。ごめん……。ごめんん……。！！！」

レツハそういうと、地面に倒れこみ泣き叫んだ。すると、ナツカがゆつくりとレツハに近づきながらこう言った。

ナツカ「そうだったんだ……。ありがとう、レツハ。ごめんね、悪いことを思い出させちゃって……。私……。あなたのことを全然知らなくて……。本当にごめんなさい！あの……。私は別に嫌じゃないよ？むしろ、嬉しいよ、あなたと話せて……。友達になる。レツハ」

ナツカはそういいながらレツハに手を差し伸べた。すると、チコがつるのムチでレツハの手を掴むと、ナツカの手に触れさせた。すると、ナツカはその手をギュツと握り締めて、レツハを起こした。そして、レツハの涙を拭くと、ジャケットなどを渡した。

レツハ「ありがとう……。俺は……。やっぱり友達にはならないお前だからこそ友達にはならない。それにもうお前には友達がいるじゃないか。2人も。それで十分さ。俺の夢は好きな女子が出来ることなんだ。昔の出来事が原因で、人も信じなかった俺に、好きな子が出来た。これはもう夢がかなったんだ。それで、その次の夢はその好きな女の子に幸せになってもらうこと。だから、俺はお前の友達にはならないし、もうこれからはお前には近づかない。一人でいや、ダンバルと一緒に、この世界を旅するよ。

ありがとう。ナツカ」

ナツカ「あ……。初めて……。ナツカって呼んでくれた……。ありがとう」

レツハ「べ、別に・・・／＼・・・それじゃあ・・・」

レツハはそういうと、静かに森の奥へと進んでいった。そして、ナツカは願った。いつかまた、レツハとあえるように、と。

「→ホグワシテイ ↓ポケモンリーグ」という看板をナツカは見つけた。それを見たボウは目を輝かせていた。

ボウ「うわー！ポケモンリーグ！ねえねえ！ここいこうよ！早速ポケモンリーグに挑戦できるよ！」

ナツカ「ちょっと待って！よく見てよ注意書きを。『ポケモンリーグにはジムバッジを計16個集めてから挑むべし。16個集めていないもの、入るべからず』って書いてあるよ。今私、バッジ1個も持っていないよ？」

ボウ「バッジ？なにそれおいしいの？」

ボウのバカさには本当にあきれる。ちなみに簡単に説明しておく。ジムバッジとはジムに行ったらもらえるバッジだ。

ナツカ「ってちょっと待てーっ！それだと全然意味ないじゃん！もう！私が説明する！ジムバッジというのは、各地のシティやタウンにあるポケモンジムで、そこでポケモントレーナーは自分の実力を試すの。それで、そのポケモンジムには必ず一人はジムリーダーという人がいて、その人はそのジムで一番強い人なの。それで、その

ジムリーダーに勝てばジムバッジがもらえるの」

おゝさすがナツカさん。詳しいゝ!!

ナツカ「いや、普通だけど・・・（汗）」

ボウ「しょんなゝ・・・シヨツク・・・」

ボウはすっかりご機嫌斜めだ。はい、ということでも・・・ご機嫌斜めのピ・チュ・ウ!!!

ナツカ「誰がピチューだよ!」

すると、そこへ、胸の背中に「R」の文字がついた服を着ている一人の女性と一人の男性、そして、Rはついていないが、その代わりに・・・ばけねこポケモンのニャースというポケモンがやってきた。

ナツカの願いと・・・（後書き）

はーい！さあ、今回は前半はシリーズで皆さん大嫌いのレッツハの過去話！それと後半（といっても短い）は少しコミカルでした！

次回は、最後に出てきた3人（正式には2人と1匹）の正体が！

「R」の三人衆！（前書き）

はい！早速アニメポケ（アニメポケモン）とコラボですよ。

今回はデュランダルさんには気づかれたあの三人衆の登場です！

で、短いです。

「R」の三人衆！

Rの女性「あぁ〜今日もジャリボーイの”ピカチュウ”をゲットできなかった・・・何とかしなさいよ”コジロー”！」

Rの男性「そんな、俺に言われても〜！！（泣）いたいいたい、叩くなよ”ムサシ”！」

ニヤース「でも大丈夫ニヤ！ニヤアが付いてれば、必ずジャリボーイのピカチュウはゲットになるニヤ〜！」

胸と背中に「R」の付いた服を着た女性「ムサシ」と、胸と背中に「R」の付いた男性「コジロー」、ばけねこポケモンの「ニヤース」は、そんなことを言いながらナツカたちのところへとやってきた。

このニヤース、とっても珍しいポケモンのようだ。なぜなら、人間の言葉をしゃべることが可能なのだから！

ニヤース「うるさいニヤ！作者は黙ってるニヤ〜！！！喰らえ！みだれひつかきニヤ〜！！ニヤニヤニヤニヤニヤニヤ〜！！」

うわ〜いたいいたい、やめて〜！！↑顔が傷だらけ。

ナツカ「あら？あなた達は？もしかして、ポケモントレーナーですか！？なら、ポケモンバトルをしましょうよ〜！！」

ムサシ・コジロー・ニヤース「え！？（ニヤ！？）」

ナツカは、この三人衆（正確にいい言えば、二人衆と一匹）をポ

ケモントレーナーだと思い込み、バトルを仕掛けた。

だが、ムサシとコジローとニヤースは、そんなことを無視して、ナツカのポケモン（チコだけ）を見て目を輝かせていた。

ボウ「って俺は!？」

お前は視覚に入っていないからダーイジョーブ!

ボウ「大丈夫ちゃうわあああああああああああああああ
あ!!!!!!!!!!」

チコ「チコ?」

チコは、三人衆（正確にいい言えば、二人衆と一匹）にずっと見つめられて、やや引つ込み気味だった。

だが、ナツカは頭に一個怒りマークをつけていた。

ナツカ「あの〜早くやりましょうよ! 2対2で!」

ムサシ「わ〜かわいい!!!! ねえねえ、コジロー! あのチコリータをゲットしない!？」

コジロー「そうだな〜!! かわいいし〜きっとサカキ様も大喜びするだろう」

ニヤース「それだけじゃニヤイニヤ! まず、ニヤアたちがこのチコリータをゲットする。そして、アジトに帰って帰ってサカキ様にあげる。そして、次の日に、サカキ様はパツと目を覚ます。すると、目の前にこのチコリータがいて、満面な笑顔で笑う。すると、サカ

キ様は朝から気分がよくなる。そして、ニヤアたちにこう言うニヤ。
『お前達にはとても感謝しているニヤ。こんなにかわいいチコリー
タをくれたのだからニヤ。そういうお前達には褒美をやらねばなら
んニヤ』とニヤ!」

ムサシ「さっすがニヤース! そうなれば・・・」

ムサシ・コジロー・ニヤース「いい感じ〜!」 アニポケでこう言
うときにいつも言うセリフを忘れてしまったので、これだけです。
誰か教えてくださーい!!!」

ムサシとコジローとニヤースはそんなことを言いながら、飛び跳
ねていた。一方、ナツカというと・・・頭に三十個怒りマークが
付いていた。

ナツカ「いい加減に・・・しろやあああああああああああああ
あああああああああああああああああああああ!!!」

ナツカはそっぴいながらそこら辺にあつた大きな岩(全長50セ
ンチ)を蹴っ飛ばした。

それを見たチコは怯えてボウに抱きつき、ボウはチコに抱き疲れ
たとたん、チコを抱きしめながら鼻血を出して気絶した(笑)

「R」の三人衆！（後書き）

次回、皆様も知っているあの人物が登場！！！！

お楽しみに！！！！

大大人気の少年と大大人気のポケモン（前書き）

よっしゃあ！行く^{シエー}！！

ナツカ「・・・フフ・・・」↑周りに黒いオーラがまとわり付く

怖いよ・・・ナツカ・・・

（書き方を一部変えました。）

大大人気の少年と大大人気のポケモン

ナツカ「もういいわ・・・こうなったら・・・。行きなさい！チコ！つるのムチ！！」

チコ「チッコ！」

チコはつるのムチでRの三人衆（正式に言えば、Rの男女2人とニヤース）に攻撃を仕掛けた。Rの三人衆（正式に言えば、Rの男女2人とニヤース）は、攻撃を喰らうとかなり吹っ飛んでしまった。

ムサシ「何で」

コジロー「こんなことに」

ニヤース「なっちゃうのかニヤ」・・・」

Rの三人衆（正式に言えば、Rの男女2人とニヤース）「やな感じ」！！！！！！」

Rの三人衆（正式に言えば、Rの男女2人とニヤース）はそう言いながら星となった（笑）

ナツカは、Rの三人衆（正式に言えば、Rの男女2人とニヤース）が吹っ飛んでいくのを見ると、すぐにチコを褒めた。チコはまるで「褒めて褒めて！」というような感じで、ナツカに飛びつく。ナツカはそれを見事に抱きとめ、笑顔で優しくチコのはっぱをなでてあげた。

チコは、とても喜んでるようだった。

ナツカ「よくやったわチコ！さすがチコね！さて、このヨーギラスはどうしましょう」

ナツカはそういいながら道端に鼻血を出してよだれもたれていて、顔がエロい顔になっている変なヨーギラスをにらみつけた。

すると、一瞬にして、ヨーギラスに寒気が走り、ヨーギラスを身震いさせた。と、そのとき、チコがナツカから離れると、ボウの横に立ち、優しくボウの顔（鼻）をなめた。するといきなりボウが立ち上がってチコを力強く抱きしめた。

ボウ「うおおおおおおおおおおお！！！！！！幸せだあああああああああ！！！！こんなかわいいポケモンに看病をしてもらうなんて！！もう、だめ……！！」

ボウは、そういいながらチコを抱きしめたまままた倒れて気絶した。顔は先ほどにらみつけられる前と同じだ。

その姿を見て、ナツカはあきれた顔をし、チコは苦しそうな顔をしながら、つるのムチで素早く連続でボウのほっぺを叩いていた。そのとき、「パチンツ」といういい音があたりに響き渡っていた。

ナツカ「さて、いきましようか」

ボウも起きたところで（ほっぺがかなり膨れていてフグのような感じだが（汗））、ナツカは目指していたポケモンリーグ……とみせかけホグワシティに向かった。

ナツカ「そういえばさ……ボウちゃんって、なんで人間の言葉がしゃべれるの？」

ボウ「え？えーと……それは……その……」

困ったな〜とボウは思った。自分は実は人間で、なぜかポケモンだったの！といえば疑われ、最悪の場合、嫌われてしまうかもしれないとボウは思っていた（いや、まず第一の声は「え！？」だと思うが……）。

ボウ「えーっと……な、何で……かなあ……お、俺も……わかんないや！」

ボウは騙そうとした。だがバレた。

ナツカ「本当は人間だったんでしょ！だってよくあるもんそういうこと。私、前におばあちゃんの家で呼んだことがあるんだけど、「ポケモンはたまに人間の言葉がしゃべることがある。それは、人間がポケモンになったか、またはテレパシーの力を持っているかのどちらかである。だが、テレパシーはある特定のポケモンしか持っていない。普段身近に見るポケモンでしゃべるというポケモンは、ほとんどが人間からポケモンになったものだ。」って書いてあったもん。それで、ボウちゃんはよく身近に見るから……」

ボウ「いやヨーギラスそう簡単には見つからないよ！？」

ナツカ「それがいるんだな。この辺の近く・・・といつてもホグワシテイの先を行ったところなんだけど、そこにはなぜかしらないけど、よくヨーギラスが集まるのよ。だから、実はいうと、ホグワシテイもヨーギラスを持っている人は多いのよね」

ボウ「へえ・・・痛っ！・・・まったく誰だよ・・・」

「??? P「ピカチュウウウウ・・・」

「??? S「ピカチュウー！大丈夫かー！！？」

「??? M「サトシさん！ここら辺は走ると危ないん・・・」

「??? S「うわっ！・・・いつつ・・・」

ナツカとボウ、チコ（チコはナツカの頭に寝転んで居眠りをしてる）の前に、黄色いネズミのようなポケモンと、赤と黒で出来た帽子、青と黒でできたジャンパー、青と黒で出来たズボンをはいた美少年と、黄色の髪の毛で、右前の髪の毛が三つ網で、フードの付いた上から下までつながっている茶色っぽい色のローブを着て、銀色に輝く十字架のネックレスをつけた美少女がやってきて、ボウは黄色いネズミのようなポケモンとぶつかったのだ。

そして、美少年はナツカのまん前でズルツ！とガキンツ！とランランランとなってしまうた（ズルツ！は滑った音で、ガキンツ！はどつかを打った音、ランランランは頭でひよこが踊っている（要するに気絶状態）のこと）。そこに、??? Mが駆け寄る

「??? M「大丈夫ですか？サトシさん。ピカチュウ」

サトシ(？)「あ、ああ・・・大丈夫。ありがとう、ミネノ。大丈夫か？ピカチュウ」

ピカチュウ(？)「ピカピカ！！」

ミネノ(？)「ん？ああ！も、申し訳ございません！どうぞ！」

ミネノという美少女は、ナツカたちがそこで待っているのに気が付き、端によった。よったのだが。サトシという美少年はよらなかった。それをピカチュウというポケモンが一生懸命サトシに伝える。だが、一刻にサトシはナツカたちの存在に気が付かない。それにちよっと腹がたったのか、ボウがこう言った。

ボウ「おうおうおう！ときやがれってんだ！アストンさまのおとりだぞ！！」

だがサトシたちには「ヨーヨーヨー」といつているようにしか聞こえていない。すると、サトシがこっち(？)といつてもヨーギラスのボウにだけだが・・・)気が付いて、目を輝かせながらこう言った。

サトシ「コイツ・・・ヨーギラスじゃん！なんか懐かしいな」ヨーギラス・・・今、元気にしてるかな」・・・」

サトシは、空を見ながらそんなことを言っていた。すると・・・

サトシ「よし！お前とバトルだ！」

とまあ、のんきなことをいつていた。すると、ようやくそこへナツカが割り込んできた。

ナツカ「あの、そのヨーギラス、私のポケモンなんですけど。まあ、バトルというのであれば、受けてたちますよ!」

サトシ「え!?!? そうなの!?!? それじゃあ、バトルだ!?! 君に決めた! リザードン!」

リザードン「フンッ……!」

サトシ「リザードン…… (汗)」

「ナツカから見てのサトシのリザードン」

このリザードン……サトシって言う人にあまりなついてないのかな。

終

すると、いきなりリザードンがボウにかえんほうしゃを仕掛けてきた。

ボウ、戦闘不能

サトシ「リザードン……それは不意打ちだよ (汗)」

そんなリザードンを見てサトシはあきれ、ミネノは苦笑い、ピカチュウはため息をしていて、ナツカは目を輝かせて、感動していた。

大大人気の少年と大大人気のポケモン（後書き）

さて、今回もまさかのアニメとコラボ！ですが、サトシと動向をしていたあの美少女ミネノは俺のオリジナルキャラです。ちょっと作ってみました。

さて次回！

チコVSリザードン・・・なのですが・・・（汗）

なんと、またあいつら襲来！

Rの三人衆・改（前書き）

はい、あいつら登場！&かなり短い！

Rの三人衆・改

サトシ「さて、次はどんなポケモンだ？」

サトシは、あきれた時の汗を流しながらも、次のナツカのポケモンを期待した。ナツカは・・・

ナツカ「うわー！あのリザードン、めっちゃ強い！しつ前はあんまりなつてないけど、すばやさといい、攻撃力といい・・・。これはやりがいがあるわ！よし！行きなさい！チコー！！」

チコ「チコオ・・・チコオ・・・チコ！？チ、チコー！！」

チコは、ぐっすり眠っていたが、ナツカのあるオーラを感じ取ったのか、目にも留まらぬ速さでフィールドへ出た。

ナツカ「チコ、たいあたり！」

チコ「チッコー！」

リザードン「グアアアア！」

チコ「チコオオオオオ・・・」

チコは、リザードンの殺気を感じ取り、ピタッっとまっけてしまった。それを見たりザードンは一瞬にニヤリと笑みを浮かばせ、いきなりほのおのうずを放った。

炎の渦は、どんどんチコの周りを囲んでいく。更に、リザードン

は勢いよく、翼を羽ばたかせ、炎を強めた。炎はどんどん強さを増していく。そして、勢いよく翼を羽ばたかせた反動で空を飛び、空中から炎に向かって急降下していった。そして、炎のまん前に来ると、その周りをぐるぐると回るではないか。更に更に強さが増していった。と、そのときであった。

ウィーンガシャン！ウィーンガシャン！

何かがこちらへやってくる音がした。音からして、これは何かの機械のようだ。そして、その正体が現れた。その正体は、大きな大きな竜のようなポケモンの形をしたマシンだった。

ミネノ「これは・・・ボーマンダ？」

ミネノは、そのマシンを見て、ボーマンダといった。このマシンは、四本足で立っていて、背中には赤い大きな羽根、二本の角が生えていた。すると、いきなり、そのマシンの翼から大きな手のようなものが現れ、ほのおのうずを消して、チコを掴み、更にはリザードンをもつかみあげた。すると、口の中にその二匹を入れてしまった。

リザードンは必死にそのマシンにかえんほうしゃなどの攻撃をし、チコも必死に抵抗するが、全く歯が立たない。

サトシ「リザードン！っく、こうなったら、ピカチュウ！10まんボルト！！」

ピカチュウ「ピカッ！ピッカッチューーーーーウ！！！！」

ピカチュウは、体全身から強力な電撃、10まんボルトを出すが、

それでもきかなかった。すると、そのマシンからある声が聞こえた。

「???」ナツハツハッ!!」

「???」A「全く貴様らの用心の無さにはあきれるねっ!!」

「???」B「こいつらはニヤアたちがもらってくニヤ!おみやーら(チコとリザードン)、早くお別れの言葉を言うニヤ!別にいわなくてもいいがニヤ」

「???」C「さっ!早くサカキ様に見せてあげないと!」

サトシ「何なんだお前達は!」

サトシがそういうと、その三人は待ってましたーっ!!とでもいうかのように、すぐにボーマンダの頭から現れた。そして、現れながら、こんなことをいつていた。

「???」A「お前達は何なんだ!という声を聞き」

「???」B「答えてあげるが世の情け」

「???」A「天から舞い降りし、輝くキューピット!」

「???」B「地から舞い降りし、情熱のキューピット!」

「???」A「ムサシ!」

「???」B「コジロー!」

「???C「ニヤース！」

ムサシ「我らロケット団の名にかけて」

コジロー「ホワイトホール、白い明日も待ってるぜ」

ニヤース「にゃ〜んてニヤ！」

「???D「ソーナンス！」

サトシ「ロケット団！」

ナツカ「あーーーーー！ーーーー！ーーーー！ーーーー！ーーーー！あなた達は！ーーーー！
！ーーーー！やっぱり……。やっぱりそうだったのね！私、知ってたんだから！あなた達とあつて、一発で分かってたんだから！あなた達……。やっぱりポケモントレーナーだったのね！まちなさ〜い！売られたバトルは買うつてもんが常識でしょ！ーーーー！早くポケモンを出しなさい！私はチョコでバトルするわ！」

ナツカがそういったとたんに、全員がズルツとガキンツとランラン状態に陥ってしまった。もちろん、ロケット団の3人（正式に言えば2人1匹）でもある。

サトシ「違う違う！あいつらはロケット団っていうやつで、悪いものたちなんだ！」

ナツカ「そっちが2人なら、こっちだって！サトシ、やってくれるよね！」

サトシ「え！？い、いやだから！」

ナツカ「嫌とは言わせないわ！早くリザードンで応戦しなさい！チ
コ！はっぱカッター！」

ニヤース「バカめ！このマシンはそんなものきかないニヤ！これでも喰らうニヤ！かえんほうしゃ！」

ニヤースがそいいいながらある赤いスイッチをおすと、ボーマン
ダのマシンの口からかえんほうしゃが出てきた。だが、そのかえん
ほうしゃもすぐに消えてしまった。

Rの三人衆・改（後書き）

次回！なんとあのポケモンが！

まさかのポケモン（前書き）

まさかですよ！？

まさかのポケモン

ミネノ「あ、危ない！」

ミネノがそういうとともに、ナツカとサトシ、ミネノは目を瞑った。

だが、ある声が聞こえると共に、マシンが壊れる音がした。

「??? エンティ！かえんほうしゃ！」

[illegible]

「フシギバナ、エナジボール！ボスゴドラ、もろはのずつき
 ！！！！！！」

フシギバナ（？）「バーナー！」

ボスゴドラ(?)「ボスゴオオオオオオオオオオ!!!」

突然、何者かがボーマンダのマシンに攻撃をしたのであった。

当然、マシンは壊れ、破壊される音が響いた。それと同時に、口
ケット団の3人の叫び声も聞こえた。

ムサシ「うわうわうわうわ……！！！！……ってて……もう！
こうなったらポケモン勝負！行きなさい！コロモリ！」

コジロー「よし、新しく捕まえたポケモン、いけ！ゴビット！」

アニメでは違うと思います

コロモリ(?)「コロコロ!」

ゴビット(?)「ゴビ!」

ムサシとコジローが面白いながらモンスターボールを投げると、一匹は顔がハートになっていて、一つしかなく、その周りにはモコモコした水色の毛のようなものがあり、その背中には黒い翼があるポケモン、コロモリとロボットのような形で、お腹の辺りには渦巻きの模様が書かれているポケモン、ゴビットというポケモンが出てきた。

ムサシ「コロモリ!フシギバナにエアカッター!」

コジロー「ゴビット!ボスゴドラにメガトンパンチ!」

ニヤース「エンティにみだれひっかきニヤ!ニヤニヤニヤニヤニヤ!」

???「エンティ、かえんほうしゃ!フシギバナもう一度エナジーボール!その後にパワーウィップ!ボスゴドラ、もろはのずつきの後にアイアンテール!あなたたちは早く安全なところへ!」

声の主はポケモンに指示をしていく中、ナツカたちに命令した。すると、ミネノがこう言った。

ミネノ「分かりました。ありがとうございますタユキさん。さあ、いきましょ」

サトシ「誰だ？」

タユキ（？）「俺はタユキ、ポケモントレーナーさ」

ミネノ「この人は・・・このオリジン地方のポケモンリーグのチャンピオンなのよ」

サトシ「え！？そうなの！？」

タユキ「まあ、とにかくトレーナーさ。よし！そろそろかたをつけようか・・・。レントラー！かみなり！ウォーグルあばれる！サクラビス、ハイドロポンプ！・・・」

レントラー「レントラーッ！！レーーーーントラーーーーー
ーーーーッ！！！！！！！！！！」

ウォーグル「ウォー！ウォーグル！！！」

サクラビス「サクー！サアクウウウウウ！！」

コロモリ「コロ〜」

ゴビット「ゴビ〜・・・」

ムサシ「これって・・・」

コジロー「もしかして・・・」

ニヤース「いつもの・・・」

[illegible]

ミネノ「何でサトシさんまで驚くの……」

ミネノは、そう思いながら苦笑いをしていた。タユキもミネノの気持ちがかつたらしく、一緒に苦笑いをしていた。だが、彼女らはまだ、これから悲劇が起こるということを知らないでいたのだ。た。

まさかのポケモン（後書き）

次回、悲劇到来！

スラッシュ団（前書き）

はい、悲劇が起きます・・・多分。

でも、その悲劇はミネノだけに・・・（汗）

ミネノ「・・・」↑気絶状態

何故こうなのかは本編にて（汗）

スラッシュ団

ナツカ「あ！チコ！！」

ナツカはチコのことを思い出し、辺りを見た。サトシもりザードンのことを思い出し、辺りを見た。だが、二匹はどこにもいなかった。すると、エンティがいきなりなき始めた。

エンテイ「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオ!!!!!!!!!」

タユキ「どうした?・・・そうか分かった。ナツカちゃん、サトシ君、ミネノちゃん、ちよつと突いてきてくれ。3人もこのエンティに乗るといい」

ミネノ「どこに行くんですか？」

ミネノが代表として、タユキに尋ねた。

「タユキ、チコリータたちの居場所が分かったんだ。エンティが探し出してくれた。さあ行こう！」

タユキにいわれて、三人はエンティの背中に乗った。ボウも目が覚めたらしく、エンティの背中が気持ちくてもぬかいとのんきなことをいつていたが、チコがいないということに気がつきまた氣絶してしまつた。

タユキ「そのヨーギラスは面白いね。君の最初のポケモンかい？」

タユキはナツカに笑顔で質問した。

ナツカ「いえ、最初のポケモンはチコリータのチコです。まあ、とはいっても、あのチコは三代目なのですが……。昔、友達……と私は思っている人とそのポケモンにいじめられて、一代目のチコはその人とポケモンにいじめられて亡くなってしまった、二代目もあの子を産んだ後に一代目と同じようになってしまったんです。それで、三代目のチコと旅をし始めて、一番最初に捕まえたのがこのヨーギラスのボウちゃんなんです」

タユキ「そうだったのか……。すまない。悪い思い出を思い出させてしまって……」

ナツカ「いえ、大丈夫です。気にしないでください」

サトシ「そういえば、ナツカは何歳なんだ？」

サトシが今度はナツカに質問した。

ナツカ「私は8歳です」

ミネノ「え！？は、八歳！！！！？……」

ミネノはナツカの体と八歳という言葉を合わせていると、案の定ネガティブ状態になり、「負けた」だの「ありえない」だのとぶつぶつぶやいていた。

サトシ「へえ、8歳なんだ。可愛いじゃん！」

サトシは笑顔でナツカにいった。ナツカは嬉しそうだったが、ミ

ネノからしては大ダメージだった。そして「私にはそんなこと言ってくれなかったのに・・・」とまたぶつぶつ言い出した。

タユキ「確かに、ちょっとロリコン的な感じになっちゃうけど、かわいと思うよ。スタイルもいいし」

今度はタユキがミネノに大ダメージを与えた。逆にナツカは笑顔でご機嫌でもあった。ミネノはタユキの言葉をきくと「私はスタイルが良くないんだ・・・」とつぶやきながらエンテイの頭に倒れこんだ。（ミネノが一番先頭、その次にナツカで、サトシ、タユキという順番にエンテイの上に乗っている）

ミネノが倒れると、エンテイは少し後ろを見ながら「フウ・・・」とため息をついていた。

タユキ「ここらしい・・・」

エンテイがとまり、タユキが指をさしながらいった場所には、「S」の文字がかかれている半円状の建物だった。今はもう夜で暗いため、Sの文字が書かれている半円状の建物は、窓から光が出ている。幸いなことに、建物の外には誰もいなかった。ちなみに、その建物がある場所は、奥深い森の中で、森の中はその建物の明かりとつきだけが照らしている。

四人はこっそりと窓から中をのぞいた。そこで見たものは、大きなカプセルの中に、チコとサトシのリザードンや、そのほかにた

くさんのポケモンが入っていて、その前には研究者や博士と見られる人、緑をベースとした服とズボンを着ていて、緑の帽子をかぶっている男性、緑をベースとしたへそが見える服とスカートをはいていて頭には小さい緑のハットをかぶっている女性がいた。そして、真ん中には、黄土色のロングヘアで黒い服の上にモコモコしているコートをはおり、長いブーツを履いている女性がいた。

タユキ「ここは、スラッシュ団の秘密基地のひとつでムツミが仕切っているのか・・・」

タユキは一人でそんなことを言っていた。先ほどからミネノのそばで伏せているエンティもタユキを見た。

タユキ「君たちはここにいてくれ。すぐにあのポケモンたちは折り返すから。それと、警察も呼んで。エンティ！行くぞ！」

タユキが小声でナツカたちにやることを言って、エンティを呼ぶと、ナツカたちは小声で反論した。

ナツカ「嫌です！チコは私のポケモンで、きっと私を待っています！」

サトシ「リザードンも同じです！」

エンティ「ウオン・・・」

エンティもナツカたちの言うとおりで、とても言うかのようにゆっくりとうなづきながらほえた。

タユキ「君たち・・・分かった。じゃあ、まずは警察を・・・」

タユキが携帯を取り出し、警察に伝えようとしたそのときだった。

???「そうはさせないぜ！」

???「私達が来たからには、あなた達はムツミさまに通報しなくてはね。」

ナツカ「誰!？」

突如現れた謎の者達に吃驚したのか、ナツカが代表として驚きながら尋ねた。

???「その言葉を待っていた!」

???「礼儀として答えよう!」

???「風のごとく素早く登場・・・」

???「雷のごとく素早く倒す・・・」

???「華麗なる踊り子”モエノ”」

???「燃え上がる情熱”ヨウジロウ”」

モエノ(?)「我らスラッシュ団の目の前に!」

ヨウジロウ(?)「立ちはだかるもの何も無し!」

タユキ「皆、行こう」

サトシ「はい」

ナツカ「分かりました」

突如現れたモエノと名乗る女とヨウジロウと名乗る男の自己紹介的なものを無視し、タユキたちは建物の中に入っていく、エンテイもぶつぶつ言いながら気絶しているミネノを背中に乗せるとタユキたちの後をついていった。

そして、その周りにはさむくい風が吹いたという。

モエノ「あ、れ？」

ヨウジロウ「どう、して？」

モエノ・ヨウジロウ「いっちゃんっのっ！……！！……！！？」

2人が抱き合いながらさういうと、中からミネノを乗せているエンテイが現れ、2人にかえんほうしゃを放った。2人は泣き叫びながら星のかなたまで吹っ飛んでしまった。

スラッシュ団（後書き）

はい・・・ミネノの悲劇でした（笑）

次回は、シリアスですね。多分。

タユキVSスラッシュ団の下っ端たち前編（前書き）

ちょっと前編とかに分けてみました。

さあ、今回はタユキが大活躍！

タユキ「行くぞ！」

タユキVSスラッシュ団の下っ端たち前編

ナツカたちは、今物陰に隠れていた。エンティは大きいためタユキのモンスターボールの中だ。そして、奥のほうから女性の声が聞こえた。

女性「フッフッフ・・・この調子で私の計画が進んでいったら、我らスラッシュ団の夢の一つがかなう！皆のもの！もつと働け！」

下っ端たち「ハッ！」

女性がそういうと、下っ端たちは敬礼をしながら大きな声で返事をした。

タユキ「あいつが、この建物のリーダーで、名前をムツミという。一見、若そうに見えるが、あいつは実は言うところ60すぎのおばちゃんなんだ。でも、油断はするな。おばちゃんだが、ポケモンバトルの実力は確かだ」

ナツカ・サトシ「はい！」

タユキが小声でそういうと、ナツカとサトシも小声で返事をした。一方、ミネノは目は覚めたが、まだ頭がくらくらするらしく、寝転んでいる。

ボウ「ハ・・・ハ・・・ハックション（ヨーーーーーギス）！！！！！！！！！！」

三人がそんなことを話していた時、ボウが大きなくしゃみをして

しまった。すると、ムツミたちがこちらに気づいたらしく、タユキたちの周りをたくさんスラッシュ団が囲んだ。すると、一人が誰かに連絡をした。すると、下からムツミたちも駆けつけ、もう逃げ場がない状態になってしまった。

タユキ「クソ・・・こうなったら・・・サトシ君ナツカちゃん、君たちは手分けをして下の連中を倒すのとらわれているポケモンたちを助けるかの分担をしてくれ。ミネノちゃんは俺に任せて！さあ早く！」

タユキはそういいながらエンテイとフシギバナとボスゴドラを出した。それと同時に、タユキたちの周りにいる全スラッシュ団^下の端たちもいっせいにポケモンを出した。

ナツカたちは、すぐにタユキに言われたとおりにして、話し合った結果サトシが下のやつらを食い止めて、ナツカがポケモンたちを助けるという結果になった。

サトシ「行け！ピカチュウ！ジュカイン！」

ピカチュウ「ピッカ！」

ジュカイン「ジュカ・・・」

サトシ「ナツカ！ポケモンたちを任せたぞー！！！」

ナツカ「はい！任せてください！！！」

ナツカは、いつの間にか敬語でサトシと話した。そして、ナツカはポケモンたちのそばへとかけていった。

一方、こちらタユキの状況。

タユキ「フシギバナ、パワーウィップ！ボスゴドラもろはのずつき！エンティはにほんばれの後にあたり一面にソーラービーム！！！」

フシギバナ「バアアアアアアアアアアア！！！」

ボスゴドラ「ボオオスウウウウウ！！！」

エンティ「グオオオオオオオオオ！！！」

下っ端たち「なに！？クソッ！！！」

下っ端たちはやはりオリジン地方ポケモンチャンピオンが相手で、結構苦戦をしていた。だが、タユキも数え切れないほどの大量の下っ端たちと戦っているため、結構苦戦をしていた。

タユキ「クソ・・・倒しても倒してもどんどんポケモンが出てくる・・・。ちよつとこれは時間の問題かもしれん・・・。ツク・・・エンティ！攻撃をやめてミネノちゃんを死守しろ！いけ！レントラー！！」

レントラー「レエエエエン！！」

タユキはエンティにミネノを守るよう指示し、タユキはレントラーを出した。

タユキ「レントラー！かみなり！」

レントラー「レエエエエントラアアアアアアアアアア！！！！！！」

タユキ「つく・・・ん！？あれは・・・ならいちかばちか・・・！」

タユキは、汗を拭きながらあるものを見つけると、何かの策が思
い浮かび、勝利の微笑を見せた。

タユキVSスラッシュ団の下っ端たち〜前編〜（後書き）

次回は後編！

タユキVSスラッシュ団の下っ端たち、後編〜（前書き）

かなり短いお！

それと、後書きにお知らせが！

ア!!!!!!!!!!!!」

タユキがそういうと、エンティは今までのかえんほうしゃとは桁違いの大きさと威力を誇るかえんほうしゃを周りに放った。周りにいるスラッシュ団の下っ端たちは全員窓から外へと吹っ飛んでいき、星のかなたまで飛んでいった。

すると、タユキの後ろに、一人の少年がゆっくりと歩いてきた。タユキは、ゆっくりと後ろを見ると、目がまるで殺されるときのような怯えている目になった。

一方、この建物外で男女2人組の者達がいた。

???「モエノ・・・これからどうするよ・・・」

モエノ(?)「決まってるじゃないヨウジロウ!拠点へ戻るのよ! ムツミ様の拠点に侵入者が入ったって!」

ヨウジロウ(?)「そ、そうだな!よし、それじゃあ・・・」

???「どこへ行くんだ?」

男女2人組のモエノとヨウジロウの前に、一匹のはがねタイプと見られるポケモンと一人の少年が今にも2人とバトルをしたいというかのような目をしながらにらみつけていた。

タウキVSスラッシュ団の下っ端たち後編（後書き）

今回はサトシの場面です。

それとお知らせです！

色々にもかきましたが、ここでこのポケモン小説に出たい！という肩を募集します！

一人につき、2人まで認めます！詳しくは色々にて。

サトシVSスラッシュ団の下っ端たち（前書き）

今回も短いです。

サトシVSスラッシュ団の下っ端たち

タユキが赤いスイッチをおす前の話に戻ろう。今度はサトシの状況だ。

サトシは今、およそ10人ほどのスラッシュ団の下っ端たちと戦っている。サトシは、ピカチュウとジュカイン、ミジュマルで応戦している。

サトシ「ピカチュウは10万ボルト！ジュカインはリーフブレード！ミジュマルはシエルブレードだ！」

サトシはそれぞれの的確な指示をする。だが、スラッシュ団も中々良い指示をしてきた。

下っ端A「ポチエナ、ほのおのキバ！」

下っ端B「ストライク、シザークロス！」

下っ端C「ゴースト、シャドーボール！」

サトシ「クッソ……結構強いな……」

サトシは、まだ子供のためか、結構苦戦をしていた。だが、そんな彼にピカチュウ、ジュカイン、ミジュマルは「あきらめるな！」とでも言うかのように声を合わせて鳴いた。その想いが伝わったのか、サトシも目つきが変わり、いつものバトルを楽しむような目になった。

サトシ「こうなったら・・・ジュカインとミジュマルはリーフブレードとシエルブレードを合体させて突撃！その後ろからピカチュウは10万ボルトで援護だ！」

サトシがそう指示すると、3匹は一緒にうなずき、言われたとおりにやった。

サトシ「とどめのピカチュウ、ボルテッカーで吹っ飛ばせ！！！！！」

ピカチュウ「ピカ！ピーカピカピカピカピカピカピカアアア
アアアア！！！！！！！！」

下っ端たち「な、なに！？うわあああああ！く、来るな
前達！……！」

ピカチュウは、サトシに言われると、ポケモンだけではなく、スラッシュ団の下っ端たちも一緒に飛ばしてしまった。それを見ると、サトシたちは抱き合い笑顔を交わした。だが、そんなサトシの戦いぶりを見て、ゆっくりと拍手をしながら一人の青年がやってきた。

「???」「これはこれはさすがだね。君。何歳?これはすごいや。是非、スラッシュ団に入ってもらいたいものだ。どうだね?スラッシュ団に入ると、とってもいいことが起きるよ。」

サトシ「俺にそんな嘘は通用しない！ポケモンたちを返せ！」

「それは無理な相談だ。だが、我らスラッシュ団の仲間になれば、ポケモンを一匹あげよう。どうだい？」

サトシ「知らない！人のポケモンを奪って、何をする気だ！そんなやつら、ロケット団と一緒にじゃないか！」

???「ロケット団？それはどういった組織だね？まあ、いい。断るといふのであれば、ここから立ち去ってもらおう……。あ、申し遅れた。私はスラッシュ団研究部A幹部の”トオル”だ。よろしく。君は名はなんだい？」

サトシ「お前にいう名前はない！素直にポケモンを返さないのであれば、力づくで変えさせてもらうのみ！ピカチュウ！頼んだぞ！」

ピカチュウ「ピカ！」

こうして、サトシとトオルのポケモンバトルが始まった。

サトシVSスラッシュ団の下っ端たち（後書き）

今回はナツカの場面ですが・・・あの人物が登場！

ナツカVSムツミの助っ人登場（前書き）

あゝコラボを約束していた方々、まだ登場ではありません。

まあ、そんなこんなで、今回はナツカの場面です。

さて、あのキャラが助っ人に！

ナツカVSムツミの助っ人登場

ナツカは今、ポケモンが入っている大きなカプセルの前にいた。

ナツカ「へえ、こんな風になってるのか。これは簡単にハッキングできちゃうわね」

カタカタカタカタ

ナツカはまるでプロのような手さばきでどんどんコンピュータを解除していった。すると、右からカプセルが開き、ポケモンは目を瞑ったまま倒れたが、すぐに目を覚ますと、ナツカはハッキングをしながらポケモンに「早くトレーナーの所に戻りなさい」といった。

ハッキングをしていくと、チコもカプセルから出て、サトシのリザードンも出ると、チコはボウちゃんに抱きつき・・・と思いきやリザードンに抱きつき、リザードンはチコを抱き上げながらナツカの元へとやってきた。そして、思い切ってチコを抱こうとしていたボウは、リザードンを見ると、瞬間的にネガティブになってしまった。

ナツカ「ボウちゃん・・・。そうネガティブにならないでよ。あ、ありがとうねリザードン。・・・よし！これでハッキングは終了！」

ナツカがそういいながら立ち上がると、どこからか、女性の声がした。

???「あらあら・・・。あなた、よくまあポケモンちゃんたちを逃がしてくれたね。覚悟は出来てるでしょうね！！！！？」

ナツカ「あなたは・・・ムツミ！！！！」

ナツカがそういいながら声のするほうを見ると、タユキの言うオバサン、ムツミとそのムツミの肩の上には、カラスのようなポケモン、ヤミカラスがいた。

ムツミ「さうで、ヤミカラス！ブニャット！やっておしまい！！！！」

ムツミはそういいながら方の上にいるヤミカラスとモンスターボールからとらねこポケモンのブニャットを出した。ナツカはそれを見ると、チョコを戦場の場に出した。もう一匹、ボウも出そうと思っただが、ボウは今ネガティブモードに突入しているので、仕方が無く、リザードンをお願いをした。リザードンは一つうなづ頷くと、戦闘モードに切り替えた。

ナツカ「行くわよ！チョコ、はっぱカッター！」

ナツカがそういうとチョコははっぱカッター、リザードンはヤミカラスにかえんほうしゃを放った。対するムツミチームはヤミカラスはリザードンにシャドーボール、ブニャットはチョコに10万ボルトを放ってきた。力は互角、結構いい勝負だ。チョコのはっぱカッターも、10万ボルトで粉碎された。

ムツミ「ヤミカラスはこごえるかぜ！ブニャットはリザードンにみずのほう！」

ナツカ「チョコ、リザードンの背中に乗って、はっぱカッター！リザードン、お願い！空中に飛んで！」

ナツカがリザードンにそういうと、リザードンはチョコと息がぴったりのような感じで、チョコがリザードンの背中に乗ると瞬間的に空中を飛び、技をかわした。更に、上からののはっぱカッター攻撃で、ムツミチームの二体はダメージを負った。

ナツカ「その調子よ！チコ、ブニヤットをつるのムチで持ち上げて
ヤミカラスに落として！」

チコ「チイイイイイイイイイイ
コオオオオオオオオオ!!!」

チコは頑張ったが、ブニャットの重みがすごいのか、あまり持ち上げられなかった。だがそんなとき、どこからか、声が聞こえてきて、ある一匹のポケモンが技を繰り出し、ブニャットが宙に浮くと、そのままヤマカラスに落ちた。ナツカは声のするほうを見た。そこには、ナツカと同じような身長の子がいた。

「ナツカ、助けに来たよ」

ナツカ「レッツハ！」

そう、その少年は、元ナツカをいじめていた少年、レッハだった。だが今のレッハの顔、目つき、行動は今までのレッハとは違っていった。まるで、悪の道から正の道へと戻ってきたような、そんな姿だった。そして、隣にはダンバル・・・いや、ダンバルの進化系ポケモン、てつツメポケモンのメタングがいた。そして、先ほどの技はそのメタングのねんりきだろう。

レツハ「ここからは、俺も参戦するよ！メタング、ヤミカラスにメタルクロー！カポエラー、ブニヤットにねこだましだ！その後にはブ

ニヤットにまわしげり！」

ナツカ「よし！チコ、つるのムチでブニヤットの動きを止めて！リザードンはヤミカラスをやっつけて！」

レツハとナツカの息の良さは、まるで双子の兄弟のようだった。チコのつるのムチで動きを封じ、そして、ねこだまして相手をひるませて、最後にまわしげりで止めを刺した。だが、カポエラーのまわしげりは普通のまわしげりとは何かが違った。それをナツカは不思議に思い、思い切ってレツハに尋ねた。

ナツカ「なんか、カポエラーのまわしげりどこか違うけど・・・どうして？」

レツハ「え？ああそれはね、カポエラーのとくせいさ。カポエラーのとくせいには二つあって、一つはいかく。相手の攻撃力をダウンさせるんだ。そしてもう一つ。これがこのカポエラーのとくせい、その名もテクニシャンさ。このとくせいはある一定の威力を持つ技（ゲームでは60以下）なら1.5倍にしてくれるとてもバトルには便利なとくせいなんだ」

ナツカ「へえ」。すごい！あ、今はバトルに集中しなきゃ！」

ナツカは新しいことを知り、とても喜んだが、今はバトル中。ふざけている場合ではないのだ。それも、これは普通のバトルではなく、何かをかけたバトルなのだから、なおさらだ。

ムツミ「くう・・・よくも私を怒らせてくれたわね・・・もういいわ。これで終りよ！！！！出てきなさい！私の友よ！！！！！」

ムツミは、そっぴいながら腰に手を当て、新たなるポケモンを出した。それは、大きなトンボのようなポケモンだった。

ナツカVSムツミ、助っ人登場！（後書き）

次回、ナツカたちに悲劇が訪れる！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2632y/>

ポケットモンスター Dream story

2011年11月27日16時52分発行